

# 教養教育英語科目における Participation の 評価内容・方法を考える

## How Do You Evaluate Participation?

立 田 夏 子\*、多 田 恵 実\*

Natsuko TATSUTA and Megumi TADA

### 要 旨

本稿では、2019年度に実施した弘前大学教養教育英語科目第3回FD「教養教育英語科目における Participation の評価内容・方法を考える」について報告する。本FDは、本学における教養教育英語科目の成績評価の一部である Participation (Class activities) の評価内容および方法等に関して担当教員間で情報を共有し、より良い成績評価および授業設計について議論して改善につなげていくことを目的に実施された。FD後に実施したアンケート調査の結果から、参加者の本FDへの満足度と本FDのトピックである Participation の評価内容・評価方法への理解度が高く、また、FDで学んだ事柄を自分自身の授業で活用しようとする行動変容度も高いことが明らかになった。教養教育英語科目担当の専任教員のFD参加率を高めること、そして、参加動機となるFDの形式を検討することが今後の課題である。

キーワード：FD、教養教育英語科目、Participation、成績評価

### 弘前大学教養教育英語科目FD

本学教養教育英語科目におけるFDは2018年に第1回が実施され、本FDが第3回となる。第1回FDは、「学生と一緒に考える アクティブ・ラーニング英語授業」と題し、2018年2月に実施された。本学教育推進機構内の別部門である教育戦略室と教養教育開発実践センターが共催することにより、教育戦略の全学的な教育改革の動向（アクティブ・ラーニングの推奨）のアドバイスを基に教養教育開発実践センターが具体的な教育を実践するという、全学的な教学マネジメント体制で実施された。「学生参加型」というそれまでの本学FDにはなかった新しいFD形式のもと、教養教育英語科目の授業のあり方をアクティブ・ラーニングの視点から、教員と学生が協同的に施行し、実践していくための議論の場として計画された。第1回FD後のアンケート調査結果から、学生の参加によってワークショップ形式の模擬授業をリアリティを伴って実現させることができたこと、そして、FDで学んだ事柄を自分自身の授業で活用しようというFD参加者の行動変容度が高いことが明らかになった（西村 他, 2019）。第2回FDは、「教養教育科目における成績評価と Moodle を用いた効果的指導・評価」と題して講義型にて2019年2月に実施された。

\* 弘前大学教育推進機構教養教育実践センター

Center for Liberal Arts Development and Practices, Institute for Promotion of Higher Education, Hirosaki University

本FDは、「教養教育英語科目における Participation の評価内容・方法を考える」と題し、2020年2月19日に、「本学における教養教育英語科目の成績評価の一部である Participation (Class activities) の評価内容および方法等に関して担当教員間で情報を共有し、より良い成績評価および授業設計について議論して改善につなげていく」ことを目的に実施された。Participation (Class activities) は、後述の通り本学教養教育英語科目の成績評価の一項目であるが、教員によってその評価内容や評価方法に対する考え方に違いがあり、教養教育英語科目にて共通理解が求められていた。そのため、本FDのトピックとして Participation が選ばれた。また、本FDには、講義型の他に、これまでの本学教養教育英語科目FDには導入されていなかった「グループ・ディスカッション」形式が導入された。本報告では、はじめに、Participation に関する弘前大学における成績評価方法を提示し、次に、本FDを説明する。その後、本FD後に実施したアンケート調査の結果に基づいて、今後の教養教育英語科目におけるFDの在り方について検討する。

## Participationに関する弘前大学における成績評価方法

### 教養教育英語科目

教養教育英語科目では、成績評価の平準化と厳密化を目指し、2016年度から成績評価の一部に外部試験結果を客観的評価として組み込む成績評価方法が導入された。この学習成果への客観的な評価の導入は、中央教育審議会大学分科会（2008）の『学士課程構築に向けて』において、「成績評価についても、きめ細かな指導を行った上で、客観化・多面化に向けた様々な創意工夫を凝らしつつ、厳格な評価を行うことか強く要請される」と述べられており、他大学においても客観的評価の導入は推進されている。英語ワーキンググループ（現英語部門）は、2016年11月に以下の成績評価方法を策定し、教養教育英語科目担当教員に周知させた。

1. 客観的評価（外部試験の結果）20%（21世紀教育科目受講者は該当しない。）
2. 教員による評価80%

以下の（1）（2）（3）の内訳は、それぞれ20~40%

#### （1）Participation (Class activities)

授業内活動への評価である。例えば、グループ活動への参加や、授業内で行った課題への評価が当てはまる。

#### （2）Examination/Presentation/Paper/Project

各クラスのレベル・各科目において設定された具体的達成目標の到達度を測定・評価する。例えば、中間・期末試験、またはそれらに相当するプレゼンテーション、レポート、プロジェクト等による目標到達度の測定・評価が当てはまる。

#### （3）Assignments/Self-study

授業外活動や自律学習の取り組みを評価する。例えば、教員から指定された宿題や、授業外で行う e-Learning、イングリッシュ・라운ジの利用を評価に組み込む際に、この項目を使用する。

本FDでは、上記2. 教員による評価（1）に示された授業内活動への評価である「Participation (Class activities)」をトピックとした。

### 『成績評価ガイドライン』

「Participation (Class activities)」は、日本語で「参加（授業内活動）」と訳され、「出席」とは異なる。この「出席」は、本学『成績評価ガイドライン』（令和元年6月21日改定）にて以下のように規定されている。

1. 弘前大学における成績評価の基本事項

(2) 出席についての規定

弘前大学では、出席が全体の授業回数の3分の2に満たない者には、不可の評価を与えることになっています。授業では毎回出席を確認するようにしてください。

出席が「全体の授業回数の3分の2」を満たしたからと言って、Participation (Class activities) の評価が満点になるわけではない。このことは、令和元年度教育推進機構FD研修会資料による『シラバス作成上の注意点』にて具体的に以下のように説明されている。

2. 作成上の注意点について

(17)・授業に出席することが当然であるため、出席を評価に加えることはできない。

→出席による評価はできないが、毎回の授業で実施する小テストやリアクションペーパーなどで評価することは可

この「出席」ではなく、「参加（授業内活動）」の具体的な評価内容および方法を担当教員間で共有し、より良い成績評価および授業設計について議論して改善につなげていくことが、本FDの目的であった。

2019年度教養教育英語科目FDの参加者と構成・内容

参加者

本FDは、Participation の評価という小・中・高等学校の学校間でも共通したトピックであったため、本学教養教育英語科目担当教員のみならず、市教育委員会および教員志望の学生にも参加を呼び掛けた。しかしながら、2月という時期的なものなのか流行し始めた新型コロナウイルス感染症対策も影響したためか、学外者および学生の参加は見ることができなかった。一方、学内の学部間では教授会等の予定の重なりにも関わらず、参加人数は27名に上った。参加者の内訳は、教養教育英語科目担当の専任教員9名・非常勤講師12名、他専任教員2名（教育学部／医学部）・非常勤講師1名、常勤職員3名であった。

構成・内容

本FDの構成・内容を表1に示す。

表1 2019年度教養教育英語科目FDの構成・内容

時間	内 容
5分	1. 開会の挨拶
5分	2. 趣旨説明
20分	3. 講演「Participation の評価はどうあるべきか？—小・中学校の意欲関心態度の評価方法から考える—」(佐藤剛講師)
5分	質疑応答
5分	4. グループ・ディスカッション「Participation の評価内容・方法」説明
20分	(1) 前期科目／情報収集的な科目 (Listening・Reading)
20分	(2) 後期科目／情報発信的な科目 (Speaking・Writing)
10分	休憩
20分	(3) (1) と (2) の報告
20分	質疑応答・総括
5分	5. 講評および閉会の挨拶

教養教育開発実践センター・小岩直人センター長による開会の挨拶の後、前半は先に述べた本FDの趣旨説明、そして、基調となる佐藤剛講師（本学教育学部）の講演へと移った。

**講演「Participationの評価はどうあるべきか？  
—小中学校の意欲関心態度の評価方法から考える—**（写真1）

中学校・大学での経験を礎に、佐藤剛講師から、実際の動画を入れた中学校・大学での授業例の紹介を交えて、Participationの評価についてご講演いただいた。はじめに、中学校での評価基準のひとつである「コミュニケーションへの関心意欲態度」は授業規律ではないとの前提から、Participationに関して以下の2つの提言とその説明があった。



写真1. 基調講演の様子

1. 評価する＝「ねらい」「目標」がある、そしてそれが達成できるように指導や練習がある。
2. どのようにペアで話してほしいのか、グループ内で積極的とはどういうことなのか、それを明確な基準として設定し、学生ができるようになるための指導と練習の場が必要である。

次に、意欲興味関心やParticipationを評価するための観点として以下の4点が示された。

1. Participationはなぜ必要か。あくまで学生のためであり、教師の都合のためにはならない。
2. Participationはどうなっていればよいか、具体的なイメージを学生と共有できているか。
3. Participationができるように指導しているか。できなかった場合にフォローが入っているか。
4. 設定したParticipationの評価規準は妥当か。学生目線に立った時、出席さえしていれば点数が入る、挙手の回数等、不適切な評価方法をとっていないか。

佐藤剛講師の講演により、これまで教員によって考え方に違いがあり、教養教育英語科目にて共通理解が求められていたParticipation（Class activities）の具体的な評価内容および方法を担当教員間で共有することができた。

**グループ・ディスカッション「Participationの評価内容・方法」**（写真2）

FD後半のグループ・ディスカッションは、「Participationの評価内容・方法」についての説明に続いて、(1)前期科目・情報収集的な科目（Listening・Reading）と(2)情報発信的な科目（Speaking・Writing）をテーマに行われた。それぞれの実践内容や疑問点などを共有する場とし、参加者は、(1)前期科目・情報収集的な科目ではListeningもしくはReading、(2)情報発信的な科目ではSpeakingもしくはWriting、のそれぞれどちらか一方のグループに参加した。その際、参加グループは、実際



写真2. グループ・ディスカッションの様子

の担当科目以外でも構わないこととした。参加人数は、Listening 7名、Reading 9名、Speaking と Writing がそれぞれ8名であった。

グループ・ディスカッションはKJ法で行われた。はじめに、(1) How do you evaluate student participation in your class? (どのように学生の授業内活動を評価しますか?) (2) What strategies do you use? (どんな方法を実践していますか?)、の2つの設問が設定され、各参加者がその答えを付箋に記入することでブレインストーミングを行った。次に、進行係がそれを集めて模造紙に貼り、各記入



写真3. KJ法によるディスカッションの様子

者のコメントに基づきディスカッションを促した。最後に、カテゴリーごとに分別し、グループ内でその内容を精査した(写真3)。ディスカッションの内容は各グループの進行係の裁量に任せられたため、評価の観点と活動内容に分けて論じたグループ、評価法より方策の共有が主となったグループ、評価法や方策を活動のタイプ別に分けたグループ、授業の段階別に方策を示したグループ等、グループによってディスカッションへのアプローチが異なっていた。表2と3に、それぞれのグループ・ディスカッションにおける上記の設問(1)に対する回答を評価の観点と設問(2)に対する回答を方策・活動内容という軸で分類する。実際に得られた回答のうち、英語表記は著者らが翻訳し、日本語表記に統一した。表

表2 グループ・ディスカッション(1) 前期科目・情報収集的な科目 (Listening・Reading)

Listening	Reading
<p>(1) 評価の観点</p> <p><u>準備</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>教科書、スマートフォンの準備はできているか</li> </ul> <p><u>テスト</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>復習小テスト</li> <li>ムードルを使った小テスト</li> </ul> <p><u>問題・質問・活動で</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>章の問題を与えて内容を理解できているか</li> <li>教科書にある活動ができるか</li> <li>質問をして理解しているか</li> <li>指名された時、答えるか、または答えようとするか</li> <li>リスニング理解の問題を4人グループに分けて、誰が答えるか答えないか</li> <li>グループで書き起こしを行う時、グループとして話し合っているか</li> </ul> <p>(2) 方策・活動内容</p> <p><u>教師の留意点</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>活動する時、明快な指示を与える</li> <li>興味深い主題を選ぶ</li> </ul> <p><u>活動の種類</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>リスニング・スクリプトに基づいたペアワーク</li> <li>小テスト、口頭の答え、選択肢などで理解を共有する</li> <li>宿題のディクテーションをグループでも行う</li> <li>指名する時、ランダマイザ(無作為に順番を変えるソフト)を使用して学生の集中力を高める</li> </ul>	<p>(1) 評価の観点</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>小テストを数回行い、授業で話した事柄についての質問を入れ、それを回答できるか</li> </ul> <p>(2) 方策・活動内容</p> <p><u>宿題</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>宿題を学生同士で答えを比較対照させる</li> <li>正誤問題</li> </ul> <p><u>ボキャブラリー</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>略語—SAS, SOSって何?</li> <li>英語辞書の最後の語は何?</li> <li>身近にある英語を見つけよう!</li> </ul> <p><u>音声活動</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>ケネディ大統領の就任演説を覚える</li> <li>誕生日の日付を一人に読んでもらって全員で聞き取る</li> <li>英語で食べ物の名前に興味をもたせる</li> <li>あなたのTシャツに書いてあるのは何?</li> <li>教科書に関連したビデオを探し、見せて、設問に従ってグループメンバーで協力して解答させる</li> </ul>

表3 グループ・ディスカッション (2) 情報発信的な科目 (Speaking・Writing)

Speaking	Writing
(1) 評価の観点 <ul style="list-style-type: none"> <li>・授業内の活動をしようとするか</li> <li>・英語で話し続けるか</li> <li>・自らの、あるいは相手の間違いを直そうとするか</li> <li>・自己表現できるか</li> <li>・指名された時、答えるか、あるいは答えようとするか</li> <li>・グループ活動に参加しているか</li> </ul> (2) 方策・活動内容 <ul style="list-style-type: none"> <li>・全員同時にする行為 (読み上げ・音読)</li> <li>・読みの練習ペアワーク</li> <li>・文化の違いを説明しておく</li> <li>・グローバル・イングリッシュであること</li> <li>・ペアワークでモデルを見せる</li> <li>・ペアワークでエクササイズの答えをすり合わせさせる</li> <li>・ペアワークで教科書の会話+2文の英作文を発表させる</li> <li>・4人グループごとに呼びかける</li> <li>・発表させる</li> <li>・俳優のように話させる</li> <li>・分からない単語、覚えたい単語をメモさせたワードリストを提出させる</li> <li>・CDを聞いて空所を聞き取るペアワーク、学生同士ですり合わせをさせる</li> </ul>	(1) 評価の観点 <ul style="list-style-type: none"> <li>・授業内でのライティング・タスク内での書いたword数 (e.g., 30 words 以上)</li> <li>・グループ活動に参加しているか</li> <li>・グループでの解答に貢献しているか</li> <li>・学生はグループ活動に集中しているか</li> <li>・ペア活動に積極的に参加しているか</li> </ul> (2) 方策・活動内容 <ul style="list-style-type: none"> <li>・Moodleを使って毎回のテーマに沿った2パラグラフ程度の作文をさせ、SNS形式でQ&amp;Aをさせる</li> <li>・ウェブ・ラーニングをさせる (タスク数)</li> <li>・10項目くらいの単文の質問に答えさせる</li> <li>・ピアレビューさせる (コメントの数)</li> <li>・エッセイの観点を整理するためベン図を書かせる</li> <li>・クリエイティブライティングのヒントを与える</li> <li>・Moodleを使ってコミュニケーションさせる</li> <li>・アメリカの俳優について書かせる</li> <li>・英語で果物の名前を書かせる</li> <li>・グループでエッセイを回してそれぞれを分析させる</li> <li>・50語で自己紹介を書かせる</li> <li>・お気に入りの格言について書かせる</li> </ul>

2と3が示すようにそれぞれ多様な評価の観点や方策・活動内容が提示されたが、基調講演で佐藤剛講師が示したように、評価の観点が学生とあらかじめ共有され、明確になっていること、そして、教員の都合に因るのではなく、Participation (Class activities) はあくまでも学生のためであり、学生の成長の方向と度合いをより正確に測ることが重要であるという認識が共有された。本FDを通して参加者がParticipation (Class activities) の評価方法を実際にどのように改善したかについては、今後調査する予定である。このグループ・ディスカッションでは、専任教員・非常勤講師・学部間で、それぞれの実践内容や疑問点などを共有しただけではなく、悩みを他の教員に相談する場としても機能した。

### 質疑応答・総括

4つのディスカッション・グループの各進行係からの発表にて、ブレインストーミングの内容共有を図った。その後、質疑応答を交えてディスカッションが終了し、最後に木村宜美教養教育英語部門・部門長の講評にて閉会となった。

### アンケート調査

#### 対象・調査項目

FD終了後にアンケート調査を実施した。アンケートの回答人数 (回答率) は14名 (53.85%) であった。アンケート調査項目は、「参加動機」と、研修の効果測定に一般的に使用される項目「満足度・理解度・行動変容度・行動容認による成果」(Kirkpatrick, 1998) に基づき、1. FDへの満足度、2. Participationの評価内容・評価方法への理解度、3. 授業への活用予定 (行動容認度)、の3項目、全4項目であった。

## 結果

はじめに、参加動機は、「内容が面白そうだったから（興味）」「役に立ちそうだったから（有益）」「グループ・ディスカッションがあるFDだったから（形式）」「断れなかったから（義務）」の複数回答式で調査した。その結果（表4）、参加動機は「有益」が最も多く、続いて「興味」となった。したがって、本FDのトピックである「Participation（Class activities）」は参加動機となったが、本FDに導入した「グループ・ディスカッション」は、参加動機に結びつかなかったことが明らかになった。

表4 参加動機

	興味	有益	形式	義務
度数	7	8	1	0

次に、「満足度・理解度・行動変容度」の分析には、中立的な選択肢を選択することを防ぐため（Brown, 1995）、偶数の4段階のリッカート尺度（1. とても、2. やや、3. あまり、4. 全く）を使用した。分析した結果（表5）、「1. とても」と「2. やや」への回答がほとんどであり、参加者のFDへの満足度と Participation の評価内容・評価方法への理解度が高く、また、FDで学んだ事柄を自分自身の授業で活用しようとする行動変容度が高いことが明らかになった。したがって、本FDの目的である「本学における教養教育英語科目の成績評価の一部である Participation（Class activities）の評価内容および方法等に関して担当教員間で情報を共有し、より良い成績評価および授業設計について議論して改善につなげていくこと」は、達成できたと考えられる。

表5 満足度・理解度・行動変容度

	満足度	理解度	行動変容度
1. とても	8	8	10
2. やや	5	6	4
3. あまり	1	0	0
4. 全く	0	0	0

## 考察・今後の課題

アンケート調査結果より、本FDの目標は達成できたと考えられる。本FDの前半では、佐藤剛講師の講演により、教養教育英語科目にて共通理解が求められていた Participation（Class activities）の具体的な評価内容および方法等を担当教員間で共有することができた。また、後半のグループ・ディスカッションでは、専任教員・非常勤講師・学部間で、情報を共有しただけではなく、悩みを他の教員に相談する場としても機能した。この、前半の講義型と後半のグループ・ディスカッション形式を組み合わせることが、本FDの目標達成につながったと考えられる。今後、本FDを通して参加者が Participation（Class activities）の評価方法をどのように改善したかを追跡調査する予定である。

本FDには、教養教育英語科目担当の専任教員9名と非常勤講師12名が参加し、その人数は過去2回のFDより多かった。しかしながら、2019年度教養教育英語科目担当は専任教員が25名と非常勤講師12名であることを考えると、専任教員の参加率が36%と低い。第1回FDでもこの専任教員のFD参加率の低さは問題視され（西村 他, 2019）、第2回FDでも同じ問題が生じていたが、本FDでもこの問題は解決されなかった。また、アンケート調査結果から、本FDで導入した「グループ・ディスカッション」は参加動機に結びつかなかったことが統計的に示されたが、ディスカッションが取り入れられているFDはよくあるため、参加動機としてわざわざ回答する必要がないと思われていた可能性は否定できな

い。学生参加型（第1回FD）も参加動機にはならず（西村 他, 2019）、講義型（第2回FD）も教員の参加人数が少なかったため、より多くの参加を求めるためには、参加動機となるFDの形式について検討することも今後の課題であろう。これらの課題を解決するためには、FDに参加することを期待されている本学教養教育英語科目担当教員対象にアンケート調査を実施し、FDにて希望するトピックや形式を調査する必要がある。一方で、第2回FDにて成績評価全体をトピックとし、本FDではその成績評価の一項目であるParticipationをトピックとして、そのトピックは参加動機となったことが明らかになったことから、カリキュラム・マネジメントの一環としては、引き続き成績評価項目である「Examination/Presentation/Paper/Project」と「Assignments/Self-study」をトピックとするFDを実施することも可能であると考えられる。また、アンケート調査結果からは、本FDの行動変容度が高いことが明らかになったが、さらにこの値を高めるためには、FDの内容を次年度シラバスに反映できるよう、シラバス提出の2月よりも早い時期にFDを実施することも検討しなければならない。非常勤講師の参加率が高いことは第1回FDでも示されており（西村 他, 2019）、引き続きこの傾向を維持していくことは、本学教養教育英語科目におけるカリキュラム・マネジメントには必要であると考えられる。さらに、本FDは、教育推進機構教養教育開発実践センターの単独開催だったが、第1回FDが教育戦略室と教養教育開発センターが共催し、全学的な教学マネジメント体制で実施されたように、他組織と連携して全学的な取り組みの一つとして教養教育英語科目FDを実施することで、本学における教育活動のさらなる発展に貢献するという観点も必要であろう。

## まとめ

本報告では、Participationに関する弘前大学における成績評価方法を提示し、その後、本学教養教育英語科目第3回FDを説明した。FDアンケート調査結果から、参加者の本FDへの満足度と本FDのトピックであるParticipationの評価内容・評価方法への理解度が高く、また、FDで学んだ事柄を自分自身の授業で活用しようとする行動変容度も高いことが明らかになった。したがって、本FDの目的である「本学における教養教育英語科目の成績評価の一部であるParticipation（Class activities）の評価内容および方法等に関して担当教員間で情報を共有し、より良い成績評価および授業設計について議論して改善につなげていくこと」は、達成できたと考えられる。教養教育英語科目担当の専任教員のFD参加率を高めることと参加動機となるFDの形式を検討することが今後の課題である。

## 謝 辞

本FDを実施するにあたりご協力いただいた英語部門の先生方と教養教育担当、そして、本FDに参加して下さった全教職員に感謝申し上げます。

## 引用文献

- Brown, J. D. (1995). *The elements of language curriculum: A systematic approach to program development*. Heinle & Heinle.
- 中央教育審議会. (2008). 学士課程構築に向けて. 中央教育審議会大学分科会.
- Kirkpatrick, D. L. (ed). (1998). *Another Look at Evaluation Training Programs: Fifty Articles from Training & Development and Technical Training: Magazines Cover the Essentials of Evaluation and Return-on-investment*. ASTD.
- 西村君平, 中村裕昭, 立田夏子, バードセール・ブライアン, バーマン シャーリー ジョイ, 多田恵実, & ソロモン ジョシュア リー. (2019). FD実践報告 学生と一緒に考える アクティブ・ラーニング英語授業. 弘前大学教養教育開発実践ジャーナル, 3, 59-65.